

桜

ガサネ
襲

○十九才の春、上京して初めて向島の桜を觀に行つたが、この時ほど桜を醜いと思つた事は無かつた。

○眼を閉たぐ……爛漫と八重の大桜が咲いてゐる。伽藍が焼落ちる紅蓮の焰の裡に爛漫と八重の大桜が咲いてゐる——再び眼を閉たぐ……若草の園の真中に幽明を隔つ鉄の扉が巍然と立ってゐる。其処にも花が散つてゐる。

○亜米利加から歸つた男が言つてゐた。

「うん何をしたつて金だけは取れる。農園へ桜ん坊を摘みに雇れたつて一日三、四弗は貰へる。何、樹のてっぺんに居るんだから甘い奴はみんな自分の口へ入れちまふのさ」

○桜に就いて調べたい事があつて図書館へ行つて一日探したが、何の得る処もなかつた。日本には桜に関する著書は無いものと見える。

○或る人が言つた。「東海道の並木に何故桜を植えなかつたらう」また或る人が言つた。「松だつたからよかつたのだ。桜だつて見ろ、今頃は一本も満足に残つてはゐなかつたらう」
(大正8年)

端

午

もの、匂ひ好む女ありけり。うす紅の菖蒲の根匂ひゆかしとて、皎齒もて千々に噛み裂きてひたぶるにかぐ。新しき樟腦の

匂ひ、山梔子の花の匂ひ、蠟燭の燃えさしの匂ひ、とりぐによろしとこの女のいひたりしが、この女の鼻の低うして円きこそをかしかれ。

今後外国に出掛ける日本人は何を忘れても大鞆の底に鯉幟を収めて行く。そして向ふの「五月一日」の空高くあの大きな鯉の姿を泳がせたら随分痛快だらふし、向ふの人達の喝采を呼ぶ事だらふ。暇が出来ると僕はこんな愚にもつかぬ事を考える。

(大正8年)

行人坂の下から

女の児たちの洋服が流行りだした此頃、ウイリアム・カナリーの独り娘メイリーを思ひだす。メイリーは、おそらく母親の手縫の、紺がすりの洋服をよく着せられて遊んでゐた。時々母親の手許をぬけ／＼して来ては、石の階段に腰かけ、可憐な顎をしかつめらしく頬杖にのせて、我等の不完全極まる言葉から、自国のロビンソン・クルソーの物語に聴きほれた折、雪白の肌に洗ひざらしの紺がすりがちつとも変でなかつた。日本の女の児たちの洋服も悪くはあるまい。が、その形に地色に、まだ／＼母親たちの眼は働いてもよきさうだ。それと、今のところまだ、よし七三とかいふ髪に結ばうとも、黒繻子の帯一本は箆笥の奥深くしまつてゐる母親たちに、外出の同伴者として今の洋服の女の児たちはまだ／＼けばけばしい。お墓詣の珠数あたりが恰好ではあるまいか。

(大正11年)